

青丘文庫研究会 月報

No.258

2011年11月1日

青丘文庫研究会 〒657-0064 神戸市灘区山田町3-1-1 (財)神戸学生青年センター内
 TEL 078-851-2760 FAX 078-821-5878 <http://ksyc.jp/sb/> e-mail hida@ksyc.jp
 在日朝鮮人運動史研究会関西支部(代表・飛田雄一)
 朝鮮近現代史研究会(代表・水野直樹)
 郵便振替<00970-0-68837 青丘文庫月報>年間購読料3000円
 他に、青丘文庫に寄付する図書を購入費として2000円/年をお願いします。

<巻頭エッセイ>

小学校の現場から

全淑美



関西に戻り、2006年から継続して小学校の講師をしている。十数年前と比べると、子どもたちの韓国・朝鮮に対する捉え方が変化している。ご存じの通り、親近度が非常に高くなっているのである。

2007年頃であろうか、授業中に落書きをしていた小5の男子児童がいて、いったい何を書いているのかのぞいてみたところ、「東方神起」などと書かれていた。当時それがいったい何をあらわしているのかわからなかった。逆に、それを通じて韓国の歌手が日本で活躍していると初めて知った。今では遠い過去の話になってしまった「冬のソナタ」も日本人の職場の同僚から紹介され、それも中国で買った海賊版というものを借りて、2003、4年頃見たという次第である。

「先生、今日な、お母さん、韓国の友だちに会いに行くねん」「へー、すごいな」といってくる子どももいる。後日、その母親にきいてみると、何を隠そう「（私はわからない…）のディナーショーに行ってきたんです！」といった感じである。さらに、ハングルを習っている保護者はどこの学校に赴任しても複数名出くわす。「先生、ハングルでお母さんの名前書いてきて言われてん」と言ったちゃっかり者もいる。もう、普通のできごとである。このように子どもたちは非常に敏感に反応していた。文化の力は、想像以上に親近度を高めてくれたと実感する。ペ・ヨンジュン様々である。

では、歴史的な認識はどうだろうか。韓流ブームに埋もれてしまって、人々の記憶から忘れ去られてしまうのであろうか。非常に危惧していたが、最近は、私の考えも変わってきた。小学校でも植民地支配をしたことは、結構しっかり？学習する。しかし、だからといって、卑屈になる子はほとんど見かけない。「昔は悪いこといっぱいしててんな、日本は。」とさざっと言っただけ。そんな子どもが普通である。私はそれでいいと思う。

好きになって興味を持てば、相手のことをもっと知ろうとする。それが人間だから、きっと自分から近づいて行くに違いないと楽観的に考えている。その方がもっと確実に素直に歴史をひもといてくれるだろうと信じている。

一方、韓国の若者はどうだろうか。先日、初めて朝鮮史研究会の年次大会に参加した。そこでも韓国からの留学生や研究者が大勢発表していたが、その発表の内容を聞いて、研究

の視点の変化を強く感じた。植民地（期）朝鮮という呼称もさることながら、より客観的に歴史を振り返っていることがわかった。両者は確実によい方向に向かっていると肌で感じる事ができた大会であった。

これらの背景には、地道に日本と朝鮮・韓国の研究を続けてきた人々がいたからで、一足飛びにできあがったものではない。

再び学校現場に話を戻すと、今年は東大阪市の小学校にかわったが、そこでは在日韓国・朝鮮の子どもがたくさん在籍していることもあって、「朝鮮文化に親しむ集い」というイベントが市をあげて毎年開催されている。今までも、規模の差はあれ、在日韓国・朝鮮人教育の一環として様々な取り組みがどこでも行われてきた。が、しかし、どこもほぼ同じような内容で、ステレオタイプが形成されている気がした。具体的に述べるスペースはないので差し控えるが、これで異文化・国際理解につながり、親近感が増すのかなあ・・・と考え込んでしまうことがよくある。もっと現代の姿を伝える必要はないのかなあ・・・。ジェギチェギ？（奈良はこれで在日韓国・朝鮮人教育をすませる学校が多数）民族衣装、踊り、これ以外ないのかなあ・・・とは言え、こちらも在日韓国・朝鮮の子どものために、また日本の問題として取り組んでいる（と思いたい）方々の地道な努力の積み重ねの結果が終結されていると思うと、感謝である。

第327回在日朝鮮人運動史研究会関西部会（2011.9.11）

再論・龍王宮から濟州へ、そして再び龍王宮へ

：濟州に関する「常識」と「在日二世的信憑」と「村落共同体の構造」

玄善允（ヒョンソニョン）sunyoonhyun@yahoo.co.jp

大阪の大川河川敷にあった在日一世女性の巫俗信仰の場「龍王宮」に関する共同研究が始まった際に、僕はその昔、学生時代に母に同行して数回そこを訪れた記憶をもとに、短文を書いた（「濟州島出身在日一世の習俗の断片」『コリアンコミュニティ研究』第1号、2010年）。そしてそれ以降、若い研究者たちの精力的な学際的研究に寄り添うようにしてそこに通り、その結果を論文としてまとめた（「龍王宮再考 聖性を欠いた場における祈りと孤立した共同性」『コリアンコミュニティ研究』第2号、2011年）。その主要な観点は、在日濟州人一世女性の祈りをほとんど「必然」のように濟州と結びつける傾向に対する違和感であった。そこで、その違和感を起点にして今度は大阪の在日一世女性の巫俗信仰の源泉とされがちな濟州の巫俗、あるいは、濟州に関する常識の検証に向かうことになり、その頼りない探索の過程を「龍王宮から濟州へ、そして再び龍王宮へ：濟州に関する「常識」と「在日二世的信憑」と「村落共同体の構造」」（『龍王宮』の記憶を記録するために 濟州島出身女性たちの祈りの場 』2011年）という長ったらしいタイトルのエッセイにまとめて発表した。今回の報告は、その拙文を紹介したうえで、今年8月の一か月足らずの濟州滞在時の追跡調査によって修正・補完するものであった。

1. 先ずは、上記エッセイの骨子を箇条書きにすると以下ようになる。

濟州の「三無神話」は、実際はキャッチコピーあるいは運動論的スローガンの匂いが強い。たとえば、泥棒のいない社会などこの世にあるはずもなく、濟州もその例に漏れない。門がないというのも、相当に誇張がある。そもそも閉鎖的な村落共同体で、その内部で盗みを働く人は稀だし、家に鍵をかけるな

んてことも普通はないのだから、それは決して済州に独自のものではない。閉鎖的な村落共同体に普遍的な事象をもってして、済州の独自性を云々するのは安手のイデオロギーに墮する懸念がある。

済州の「緊密で平等な共同体」という説については、それにノイズをもたらず存在がいた、という事実を偶然に知ることになった。70年代初頭くらいまで、済州の村落には村の共用の下働きをする「下人（ハイン）」という人々がいたらしく、その存在と、往々にして牧歌的なものとイメージされがちな村落共同体との関係はどうなっていたのか。また巫族祭祀にとって不可欠な「神房（シムバン）」たちも、村の共同体なるものにあって、いかなる位置にあったのか。済州の村落共同体について考えるためには、そうした共同体論にいわば「ノイズ」を醸し出す存在をも視野に入れて考えるべきではないのか。「下人」にしる「神房」にしる、現実の差別問題など実に微妙な事情もあって、活字化されることがないからこそ、忘れ去られがちなのだが、緊密な共同体というものには、当然、その内部における緊密な位階制度、禁忌があったのではなからうか。要するに、排除と包摂の論理が働いていたのではないか、といった想像力と実証の努力が求められるのだが、在日的（日本的）感傷がそれを妨げる場合が多そうである。

翻って龍王宮に戻れば、その精力的な研究にも、先験的なイメージあるいは常識に誘導される危惧がないのか、改めて具体的に検証の必要があるだろう。その一方で、龍王宮を「在日」の巫俗全般、さらには習俗全般に位置付ける必要があるだろう。そしてその延長で、龍王宮ならびに在日一世の巫俗信仰を在日の精神史（政治、社会運動の変遷）の中に位置付けてみてはどうだろうか。「在日」の民族運動、政治運動と女性の巫俗信仰との関係という大風呂敷の嫌疑が濃厚な夢想！

2. 拙文の間違いの訂正あるいは新たな情報、まとめ

個々の間違いの修正などの詳細については、ここでは省略する。

インタビュー調査などで、「下人」に関する新情報が多々あった。とりわけ、村によって、「下人」の扱いが異なっていたようである。また、「下人」に対する無言、あるいは子供の場合には苛めといった形で、差別は今でも、特に村落ではすっかり消えたわけではないことを確認できた。したがって、それについて公言することがはばかれるという事態はある程度続いているものと思われ、実証の困難は解消されそうにない。

巫俗、堂通いの当事者の型、あるいは継承の仕方についても各種あることが確認できた。総体的に、教育経験の有無、都市と農村の差異、そして大宗教の浸透と巫俗信仰の衰退の相互関係が明らかであった。

以上を「在日」の巫俗信仰の盛衰、世代間断絶、そして在日の「聖なるもの」とどのように関連させて考えることができるか、今後の課題ははてしなく多い。しかし、対象を限定しながらの実証的な研究を重ねていきたい。



『在日朝鮮人史研究』 41号(2011年10月)

(A5、152頁、在日朝鮮人運動史研究会編、緑陰書房発行、2520円)

特価2000円で販売します。購入希望者は、
郵便振替<00970-0-68837 青丘文庫月報>で
送料160円とあわせて、2160円をご送金ください

在日一世の漢詩人たち 崔碩義
戦前期大阪における朝鮮人医療問題 塚崎昌之
足尾銅山・朝鮮人戦時動員の企業責任
村上安正氏の批判に答える 古庄 正
朝鮮学校教育の「日常」からの性格検討 一九五〇年代後半における
朝鮮学校教員に求められた「教員性」の分析から 吳永鎬
在日朝鮮人社会における「統一」論
民団系在日朝鮮人の韓国民主化運動団体を中心に 趙基銀
朝鮮における解放前一年史 戦時労働動員を中心に 樋口雄一

青丘文庫研究会のご案内

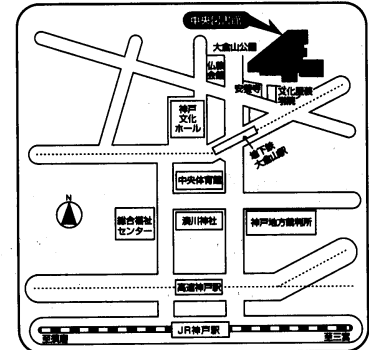
第281回朝鮮近現代史研究会

11月13日(日)午後3時~5時

「竹島=独島領有権問題について」 朴 炳涉

在日朝鮮人運動史研究会関西部会はお休みです。

会場 神戸市立中央図書館内 青丘文庫 TEL 078-371-3351



【今後の研究会の予定】

2011年12月11日(日)在日(林茂澤、玄善允) 近現代史(未定) 2012年1月8日(日)在日(伊地知紀子) 近現代史(未定) 2月12日(日) 在日(池貞姫) 近現代史(未定) 研究会は基本的に毎月第2日曜日午後1~5時に開きます。報告希望者は、飛田または水野までご連絡ください。

【月報の巻頭エッセイの予定】

12月号は、塚崎昌之。よろしくお願ひします。締め切りは前月の10日です。

【編集後記】

11月の研究会は、島根から朴炳涉さんか来られて発表していただきます。ふるってご参加ください。もう、11月です…。みなさん、健康に留意してご活動ください。 飛田雄一 hida@ksyc.jp